

追憶する老体の柳―《遊行柳》の季節はなぜ秋なのか

灘中学校高等学校教諭・能楽研究者

中嶋 謙昌

《遊行柳》は、《船弁慶》《紅葉狩》などの作者として知られる、観世小次郎信光最晩年の作品である。白河の関付近にある朽木の柳の精が、遊行上人から回向を受けて成仏し、報謝の舞を見せる。舞台上には柳の作り物が置かれ、青々とした葉の印象も強い。「見渡せば柳桜をこきまぜて都ぞ春の錦なりける」（古今集・素性法師）という和歌があるように、古典和歌の世界では、柳は春の景物として扱われることが多いのだが、《遊行柳》は秋の曲である。

現在、秋の柳を俳句などに詠むことは珍しくなく、「柳散る」という秋の季語もある。しかし、平安時代においては柳は春のものであった。少なくとも、古典和歌の亀鑑とされた八代集（古今和歌集）から『新古今和歌集』に至る八つの勅撰和歌集に、秋の柳を詠んだ歌は収められていない。大多数は春の柳で、夏の柳がわずかにある程度である。何も考えなければ、柳は春である。

前場の初回（最初の地謡）では、「げにさぞな所から、人跡絶えて荒れ果つる、葎蓬生刈萱も、乱れ合ひたる浅茅生や、袖に朽ちにし秋の霜、露分け衣きて見れば、昔を残す古塚に、朽木の柳枝さびびて、蔭踏む道は末もなく、風のみ渡る気色かな」（「上ゲ歌」）と、秋の情景を描写する。「蔭踏む道」とは、「うち靡き春は来にけり青柳の蔭踏む道に人の

休らふ」（新古今集・藤原高遠）を踏まえた表現で、春の柳を詠んだ和歌が、わざわざ秋の描写に転用されている。

しかも、《遊行柳》の初演は、永正十一年（一五一四）三月、新黒谷での観世大夫勸進能の折であつたらしい（表章『作品研究（遊行柳）』、『能楽史新考』）。晩春三月初演の能であつたにもかかわらず、季節を秋に設定しているのは、信光の明確な意図によるものであろう。

なぜ信光は《遊行柳》に秋を選んだのだろうか。

秋の柳は漢詩に先例がある。唐の詩人白居易に「城柳宮槐漫揺落 愁悲不_レ到_二貴人心_一」という詩句がある。「都の柳や宮中のえんじゅの葉が、秋風に吹き乱されて散ってしまったが、秋の季節の悲しみは、今を時めく貴人の心には感じられないだろう」と解釈できようが、『和漢朗詠集』にも採られ、日本でも知られた句であつた。

平安時代が終わりを迎えると、和歌の世界でも、秋の柳がモチーフに選ばれるようになる。このころ、「村雨の雲吹きすさぶ夕風に一葉づつ散る玉の小柳」（順徳院）、「玉島や落ち来る鮎の川柳下葉うち散り秋風ぞ吹く」（藤原家隆）などの歌が詠まれているが、この新たな歌材を評価したのは、鎌倉期から南北朝期の京極派歌人であつた。

京極派とは、当時の歌壇の主流・二条派と対立した、和歌

の一派である。『玉葉和歌集』『風雅和歌集』という二つの勅撰和歌集を編み、鋭い感覚の和歌を多数収めている。その点で二条派が撰んだ他の勅撰集とは一線を画している。秋の柳の歌は、玉葉集に一首、風雅集に十首見られ、ここでも二条派とは異なる独自の美意識が示されている。先の順徳院や藤原家隆の歌は、風雅集に収められているが、秋の柳は、他の勅撰集では新統古今集に一首収められるのみであった。

室町時代に入っても、秋の柳、散る柳は、正徹や心敬など、鋭敏な感覚を持った歌人・連歌師たちによって詠まれている。信光が具体的にどこから着想を得たのか、これだけでは判断できないが、秋の柳が当時としては平凡ならざるモチーフであったことを窺わせる。

いずれにせよ、秋の柳にはこのような文学史的背景があったのだが、これだけでは、信光が《遊行柳》に秋を選んだことの説明としては不十分であろう。

《遊行柳》は、同じく草木の精をシテとする老体の能、世阿弥作の《西行桜》を模倣したものと言われる。一時期は、「柳づくしだが、関連性のない故事を連らね」た「風流能的性格」の能と評価されることもあり（日本古典文学大系「謡曲集」など）、確かにそのような一面は否定できない。しかし、近年の研究では、「道のべの朽木の柳が過ぎ去った昔を偲ぶ」という和歌の連歌的発想を下敷きにし「た「新しい能」、という評価もなされている（樹下文隆「《遊行柳》の構想」、

『能研究と評論』一六）。

信光は、表面的な面白さを追求した風流能ばかりではなく、懐旧の情を文学的に描く、内容的にも奥行のある作能も行っていった。このような近年の研究成果を踏まえると、老木の桜をそのまま春に描く《西行桜》とは異なる、新たな老体の能のあり方が、秋の柳を描く《遊行柳》で表現されたとも言えるのではないか。

本曲の後場は、華やかな柳の故事や詩句などを点綴した後に、秋風が「露も木の葉も散り散りに」吹き払い、後にはただ朽木の柳だけが残るといふ閑寂の景で終曲する。「柳桜」のように、春の景物として桜と一対で扱われることのある柳だが、柳が落葉する秋を「今」に設定することで、〈華やかなりし昔の春〉と〈衰えたる今の秋〉という時間的な対比が明確になる。樹下氏が主張する懐旧の主題も、これによって十分に効果を生んだはずだ。老体能の素材として、秋の柳を見出したところに、《遊行柳》の成功があったと捉えておきたい。

信光は、春の桜をシテとする《西行桜》に対して、秋の柳をシテとする《遊行柳》を作った。それはただ素材や季節を変えたというのではなく、追憶する老体にとつて、より適した設定を見出したということなのだろう。古典和歌の類型的季節感から一歩踏み出すことで、新たな能を生み出す手法を、最晩年の信光は会得していたようである。